となりのアンパンマン

丸田　礼子

二〇一二年三月十日付けの朝日新聞土曜版に、「被災地を励まし続けたアンパンマンのマーチ」と題するコラムが掲載された。

記事によると、「アンパンマンのマーチ」を最初に流したのはラジオ局TOKYO FMの番組制作部プロデューサーであった。二〇一一年東日本大震災から丸一日が過ぎ、聴取者から「被災地に届けたい音楽」を募集し、英国のバンドの曲を流したがしっくりこなかったという。もっとストレートに被災者の心に届く曲はないのかと思っていたとき、目にとまったのが「アンパンマンのマーチ」だった。自分の三歳の娘のことがふと頭をよぎり、「被災地の子どもはどうしているんだろう。大人たちの不安な顔を見てどんな気持ちでいるんだろう。少しでも子どもたちに日常の気配を取り戻させてあげないと、と思った」。そうだ。

その日の夕方から、系列局全三八局で「アンパンマンのマーチ」が流された。通算で何回流したかは記録に残っていないそうだ。その後、この曲はNHKなど他のラジオ曲でも繰り返し流され、あまりに大きな痛手に被災地はもちろん、日本全体が心が折れそうになる中「心の復興」の歌として人々を励まし続けたと書かれている。

これらの一連の記事を読んで、最も揺さぶられたのは、子どもはもちろんのこと多くの大人が「アンパンマンが勇気をくれた」とこの歌によって励まされたということだ。

私の持っていたアンパンマンのイメージと言えば、次のようなものであった。

親戚の幼児は、1～2歳ごろからアンパンマンが大好きで、玩具や食器についているアンパンマンの図柄を指さしては「あん・ぱん・まん」と大声で呼びかけ、飽きもせず毎日これを繰り返し、ぐずっていても「ほらアンパンマンだよ」と声かけすると、あわてて起き上がった。静かにさせたいときは、アンパンマンのビデオを見せておくと、とりあえず静かになるので、大人は部屋の中でも車の中でも都合よく見せていた。

アンパンマンは乳幼児のものと思い込んでいたのに、大惨事の中、大人をも励まし続けた歌とは？

そうだ　うれしいんだ／生きる　よろこび／たとえ　胸の傷が痛んでも／なんのために生まれて／なにをして　生きるのか／こたえられないなんて／そんなのは　いやだ／今を生きる　ことで／熱い　こころ　燃える／だから　君は　いくんだ／ほほえんで／そうだ　うれしいんだ／生きる　よろこび／たとえ　胸の傷がいたんでも／ああ　アンパンマン／やさしい　君は／いけ！　みんなの夢　まもるため／なにが君のしあわせ／なにをしてよろこぶ／わからないまま　おわる／そんなのは　いやだ！／忘れないで　夢を／こぼさないで　涙／だから　君は　とぶんだ／どこまでも／そうだ　おそれないで／みんなのために／愛と　勇気だけが　ともだちさ／ああ　アンパンマン／やさしい　君は／いけ！みんなの夢　まもるため／時は　はやくすぎる／光る星は　消える／だから　君はいくんだ／ほほえんで／そうだ　うれしいんだ／生きる　よろこび／たとえ　どんな敵が　あいてでも／ああ　アンパンマン／やさしい　君は／いけ！　みんなの夢　まもるため

これらの歌詞を読み込んで驚いた。とても乳幼児の歌とは思えない。重い問いかけに満ちている。

そもそもアンパンマンに込めた原作者のやなせたかし氏の思いとは、いかなるものなのか。

ヒーローとしてのアンパンマンが誕生した背景には、やなせ氏の従軍体験がある。戦

いのなかで「正義」というものがいかに信用しがたいものかを痛感したのだ。やなせ氏は「正義のための戦いなんてどこにもないのだ。正義は或る日突然逆転する。正義は信じがたい」。「逆転しない正義は献身と愛だ。それも決して大げさなことではなく、眼の前で餓死しそうな人がいるとすれば、その人に一片のパンを与えること」。「困っている人、飢えている人に食べ物を差し出す行為は、立場が変わっても国が違っても“正しいこと”には変わりません。絶対的な正義なのです」。「正しいことをする場合、必ず報いられるかというと、そんなことはなくて、逆に傷ついてしまうこともあるんです」。とインタビュ―や絵本のあとがきなどで述べている。こういう思いが「困っている人に食べ物を届けるヒーロー」という着想につながり、アンパンマンが生み出されたのである。

アンパンマンに込められた哲学は、傷つくことを覚悟しなくては正義は行えないということと、献身と自己犠牲である。詩人でもあり、童話作家でもあった宮沢賢治が作品に込めた自己犠牲という哲学的な想いに重なる部分があるように思う。

もちろん「アンパンマンのマーチ」の歌詞にもやなせ氏の思いが表れている。やなせ氏は「ぼくはずいぶん長い間、自分が何のために生まれてきたのかよくわからなくて、闇夜の迷路をさまよっていた」。「なんのために生まれて何をして生きるのか。これはアンパンマンのテーマソングであり、ぼくの人生のテーマソングである」。と述べている。

アンパンマンのマーチは、アンパンマンも人生の意味を見つけるために行動している。困った人を助け、人のために尽くすことで、生きる喜び、充実した生が味わえる。人を助けることは自己犠牲を伴うことであり、自分自身無傷ではいられない。生きていく以上、喜びだけでなく、苦しさ辛さも味わわなければならない。人の一生は短いからこそ一瞬一瞬大切に生きよう。と呼びかけているのだ。

大きな痛手を負った被災地の方々（子どもも大人も）は、朝に夕にラジオから流れてくるアンパンマンのマーチにどれほど慰められ、力づけられたことだろう。赤いほっぺたに赤い鼻、丸顔で微笑しながら、さあ食べなさいと顔を差し出してくれるアンパンマン。今は怖くて辛くて苦しいけれど、生きていれば明日もまた生きられる。そうやって次が開かれるよと寄り添ってくれるアンパンマン。

アンパンマンのマーチが被災地の人々を励まし続けたということは、当然であった。

絵本のアンパンマンは当初、貧困に苦しむ人々を助けるという内容であり、未就学児には難解な内容だと、出版社からは「もうこれっきりで」と言われ、幼稚園の先生からは「顔を食べさせるなんて残酷」と言われ、絵本評論家からは「子どもはこんなくだらない絵本を読んでも面白がらない」と酷評された。しかし次第に子どもたちの間で人気を集め、幼稚園や保育園などからの注文が殺到するようになったそうだ。

恐るべし。子どもの感性！素晴らしきかな。子どもたち！

幼児たちがアンパンマンに夢中になる要因として、アンパンマンの姿とかたちが、幼児たちの心をとらえるための条件にぴったり合っているということ。顔は曲線を中心にしたきわめてシンプルな構成をしていて、体に比してかなり大きなものとなっている。これは、人間にとって「かわいらしい」と感じさせるかたちなのだそうだ。色彩についても、アンパンマンの顔はあんぱん色の茶色をしている。衣装も赤と黄を基調にしていて、全体として暖色系で、これも幼児が好む傾向だそうだ。そしてなんと言ってもネーミング。幼児は「アン・パン・マン」「アンパンマン」と楽しくてたまらないように、必要以上に口にする。ア

ンパンマンという名前は、幼児にとって非常に発音しやすいように構成されており、「パパ」や「ママ」と同じくらい発達段階のなかで、早期に発せられる「易しい音」である。発音が易しく、イメージ的にも優しく、また口にするのが楽しい名前の「アンパンマン」は、言葉を覚え始めた年頃の子どもたちの快感が伴う言葉なのである。この他、アンパンマンのストーリー性や登場人物など、子どもたちがアンパンマンに夢中になる要因は探ればまだまだ出てくるだろう

しかし、今回、私が最も感動を覚えたのは、原作者のやなせたかし氏が絵本のアンパンマンに込めた思いを、発売当初は大人が理解できず酷評し、言葉を覚えたばかりの子どもが理屈抜きで支持したこと。子どもたちが支持しなければ、アンパンマンは消える運命にあった。子どもたちの支持があったからこそ、アンパンマンは存在し続け、「アンパンマンのマーチ」が東日本大震災で深く傷ついた人たちに寄り添い、本物の持つ力によって励ますことができたのである。

私たちだって、アン・パン・マン！　アン・パン・マン！　アンパンマン！　アンパンマン！　と言葉を覚え始めた幼児のように、何度でも口にしてみたい。

出典

やなせたかし「アンパンマン」
やなせたかし「アンパンマンの遺書」
心に響く世界最弱のヒーロー―アンパンマンの正義～やなせたかしさんに聞く
長谷部陽一郎「アンパンマンはなぜ子どもを夢中にさせるのか」
野村順一「色の秘密」
黒川井保子「怪獣の名はなぜガギグゲゴなのか」